

パネルディスカッション

非認知能力と子どもの日本語の学習・教育—アイデンティティを捉え直す—

教室において変容するアイデンティティと教育的介入の可能性

—中学生アナのダイアリーを通して見えてくるもの—

発表者氏名 立山 愛 （別府市教育委員会 日本語指導員）

1. はじめに

本稿では、筆者が日本語指導員として担当した中学生アナ¹との時間を、アナが母語で綴ったダイアリーを通して振り返り、アナがどのように言語学習に投資していったか、そしてその投資とアイデンティティがどのように交差し、変容していったのかを事例として描く。アナが教室という社会の中で言語学習に対して行うさまざまな投資によって得ていく象徴的資本（教育、友情、関係性）が、アナのアイデンティティ（未来への可能性）にどう相互作用していくのかを捉え、パネルディスカッションにおいて教育的介入の可能性を探りたい。

2. 支援開始時のアナ

アナは、保護者の日本での就労に伴い、中学2年の2学期に転入してきた。とても明るくてコミュニケーション力が高く、筆者ともすぐに打ち解けていった。日本語の授業では、日本語学習だけでなく、子どもたちに自分の母語で自分の気持ちを出すことも大切にし、感じている気持ちを母語で書いてもらうことにしている。以下、アナが母語で書いてくれたものを日本語に訳して記載していく。「初めての授業の日、先生や友達のことが理解できないという非常に言葉では言い表せない感覚を覚えています。多くの困難に直面し、知識不足と言語の壁により、成績が下がり、自分に失望しました。」

アナはその後、学習に対する投資とその見返りについてこう語った。

「私が最も心掛けていることは、コミュニケーションや友達を作ることではなく、おそらく、この国について学び、何かをすることです。私の今の努力は十分ではないかもしれませんが、その努力が私を強くし、快適ゾーンから一歩踏み出して新しいことに挑戦します。明日の自分が今日の自分よりも必ず何かの形で良くなるよう、これ以上自分がかかりしないようにこれからも努力していきたいと思います。」

ノートンは、学習者の情意フィルター²は、アイデンティティと深くかかわりあう社会的構成概念として理論化される必要があると述べている。アナは学習の成否を自身の能力や努力不足の結果だと捉えているが、さまざまな要因によって構築されているということを教育に携わる立場としてまず理解した上で支援をしていくことが大切ではないだろうか。

3. 社会的ネットワークへアクセスしていくアナ

アナは、音楽の授業で歌唱力に一目をおかれ、合唱部に入ることを勧められた。合唱部に入部し、熱心に練習し、発表の場で歌うようになり、大きな大会での受賞に貢献した。合唱部での活躍の経験という象徴的資本を得たアナは、積極的に周囲との交流にも投資をするようになった。休み時間に友人と過ごす姿が増え、次第に社会的なネットワークにアクセスできるようになっていった。そして、未来への可能性を語るようになった。

「私の国にいたらこんな風に挑戦することはなかったと思います。日本に来られてよかった。日本で勉強がたくさんできる高校に行きたい、そして大学にも進学したい。将来は自分のように外国から日本に来る人たちにカウンセリングするような仕事がしたいです。」

アナは受験に向けて、日本語の学習と並行して、すべての教科を学ぶことを希望した。アナの心情を理解した国語担当教師は、提出物や発表は母語でもよいとし、タブレット端末の翻訳機能を活用し、国語の授業に参加させた。学期末の通知表では日本語のテストの点数も加味され、高い評価を得るよ

うになっていった。アナは社会的なネットワークにつながることで、未来への可能性に希望を抱き、アイデンティティを再生産していくのと同時に、結果として日本語の習得も促進された。

4. アイデンティティの交渉が許されないアナ

一方、社会の授業では、社会の内容はアナの日本語のレベルでは学習参加は難しいという理由で、別室で自習するように促され、周縁化させられた。アナは社会の授業への参加を望んでいたが、交渉は叶わないまま、中学3年に進級した。アナは、国語、数学、英語の3教科で受験できる高校を選択することになり、在籍した1年半の間、社会の授業に参加することはなく、社会の通知表は空欄のままだった。

「私は自分の国で社会の勉強が好きだったし、得意でした。日本ではどんな社会の勉強をするのか知りたかったです。」

また、学級での役割決めをする際、アナは学級委員長に立候補しようとした。しかし、教員側からもう少し日本語が上達してからというニュアンスで伝えられ、アナは希望を取り下げた。

ノートンは「『私は誰なのか』という問いは、『私は何をすることが許されているのか』という問いと切り離して理解することはできない。」と述べている。また、学習者は手に入れたものを心に秘めながら忍耐強く努力するという点で、人間の行為主体性とアイデンティティの役割を強調している。学習者は「劣った非母語話者」ではなく、自分で選択できるアイデンティティに基づき、自分でこうあると決めた自分になる努力ができる、したがって、新しい社会的な力関係のもと、たえず再評価され、再交渉されなければならないと述べている。しかしながら、教室という権力の磁場の中で、生徒であるアナが行為主体性を行使することは容易ではなかった。

5. 子どもの文脈でノートンのアイデンティティ概念をどう活かせるか

ノートンは成人の移民女性たちのダイアリーからアイデンティティ概念を考察しているが、アナのような子どもの場合も、言語習得は単に学習者の努力と献身で獲得する技能ではなく、アイデンティティに関わる複雑な社会的実践であるということが、アナのダイアリーを通して見えてくる。ただ、子どもの場合、社会的実践の場の多くは学校や教室であり、周囲にいる教育者のアイデンティティの捉え方、教育的アプローチの仕方が大きな影響を与えることになるだろう。教室の中の教師と生徒の在り方が、教室の外のマクロなレベルでの社会構造の在り方に強く影響を受けているとすれば、教師と生徒が協働して教育を変えていくことで社会構造を変えていけるのではないか。

高校入試を控えたある日本語の授業時間、アナは私にこう言った。

「先生は、船です。広い海で泳いでいて、どうしたらいいかわからないとき、やってくる船」

この言葉を聞き、日本で言語的マイノリティであるアナのような生徒が受けている教育体制がサブマージョン教育（消極的二言語教育）であることを痛感した。サブマリン、潜水艦という語感が伝わるだろうか、日本の学校や教室が海だとすれば、海の中で、周りの子たちの泳ぎを見て自然に学びとることが期待されている状態、うまく真似して泳げない子は沈んでしまう。私という船は、高い非認知能力を持つアナの未来の可能性としてのアイデンティティを発動させることは困難だった。アナのような子どもたちを教育の場面で周縁化させることなく、行為主体性を育めるよう、教育的介入の可能性についてディスカッションしたい。

【引用文献】

ボニー・ノートン（2023）『アイデンティティと言語学習—ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐって広がる地平』中山亜紀子、福永淳、米本和弘訳 明石書店

1 プライバシー保護のため、個人名は仮名を使用する。

2 言語学者スティーブン・クラッセンが提唱した概念で、学習者の置かれた環境によって生じる負の感情や抵抗感などを指す。